

## なよ竹のかぐや姫 本文

今は昔、/竹取の翁といふ者ありけり。/野山にまじりて竹を取りつつ、/よろづのことを使ひけり。/名をば、讃岐の造となむ言ひける。/その竹の中に、/もと光る竹なる一筋ありける。/あやしがりて、寄りて見るに、/筒の中光りたり。/それを見れば、三寸ばかりなる人、/いとうつくしうてゐたり。

/翁、言ふやう、「我朝ごとタごとに見る竹の中に/おはするにて知りぬ。/子になり給ふべき人なんめり。」/とて、手にうち入れて、/家へ持ちて来ぬ。/妻の嫗に預けて養はす。/うつくしきこと限りなし。/いと幼ければ籠に入れて養ふ。/

竹取の翁、竹を取るに、/この子を見つけて後に竹取るに、/節を隔てて、よごとに/黄金ある竹を見つくること重なりぬ。/かくて、翁、やうやう豊かになりゆく。/

この児、養ふほどに、/すくすくと大きになります。/三月ばかりになるほどに、/よきほどなる人になりねれば、/髪上げなど左右して、/髪上げさせ、裳着す。/帳のうちよりも出ださず、/いつき養ふ。/この児のかたちの/けうらなること、世になく、/家のうちは暗き所なく、/光り満ちたり。/翁、心地あしく、苦しきときも、/この子を見れば、苦しきこともやみぬ。/腹立しきことも慰みにけり。/

翁、竹を取ること久しうなりぬ。/勢ひ猛の者になりにけり。/この子いと大きになりぬれば、/名を、御室戸斎部の秋田を呼びて、付けさす。/秋田、なよ竹のかぐや姫と付けつ。/このほど三日、/うちあげ遊ぶ。/よろづの遊びをぞしける。/男はうけきらはず呼び集へて、/とかしく遊ぶ。/

世界の男、/あてなるもいやしきも、/このかぐや姫を得てしがな、/見てしがなと、/音に聞きめて惑ふ。/